

富田碎花詩集

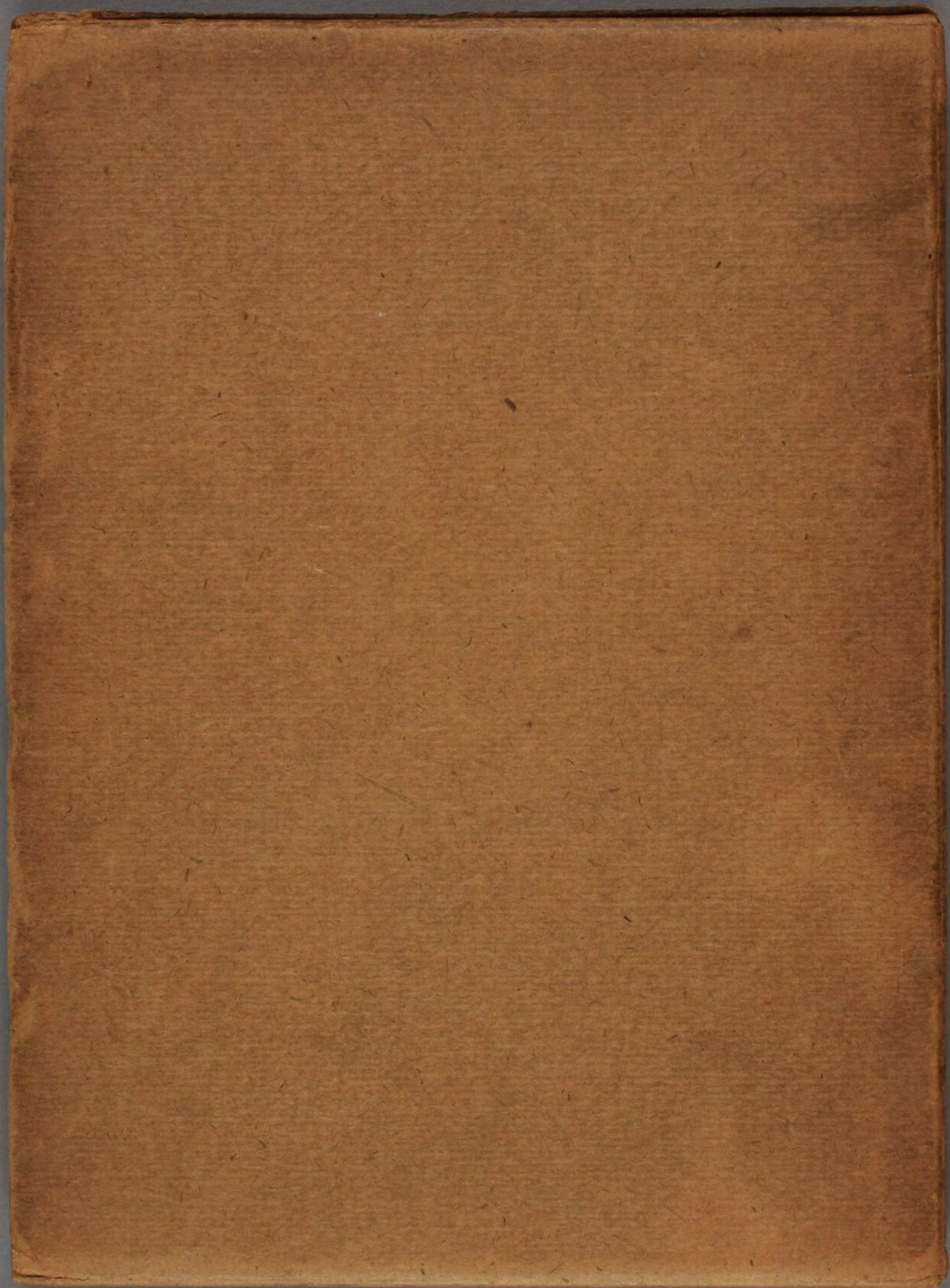
時代の手

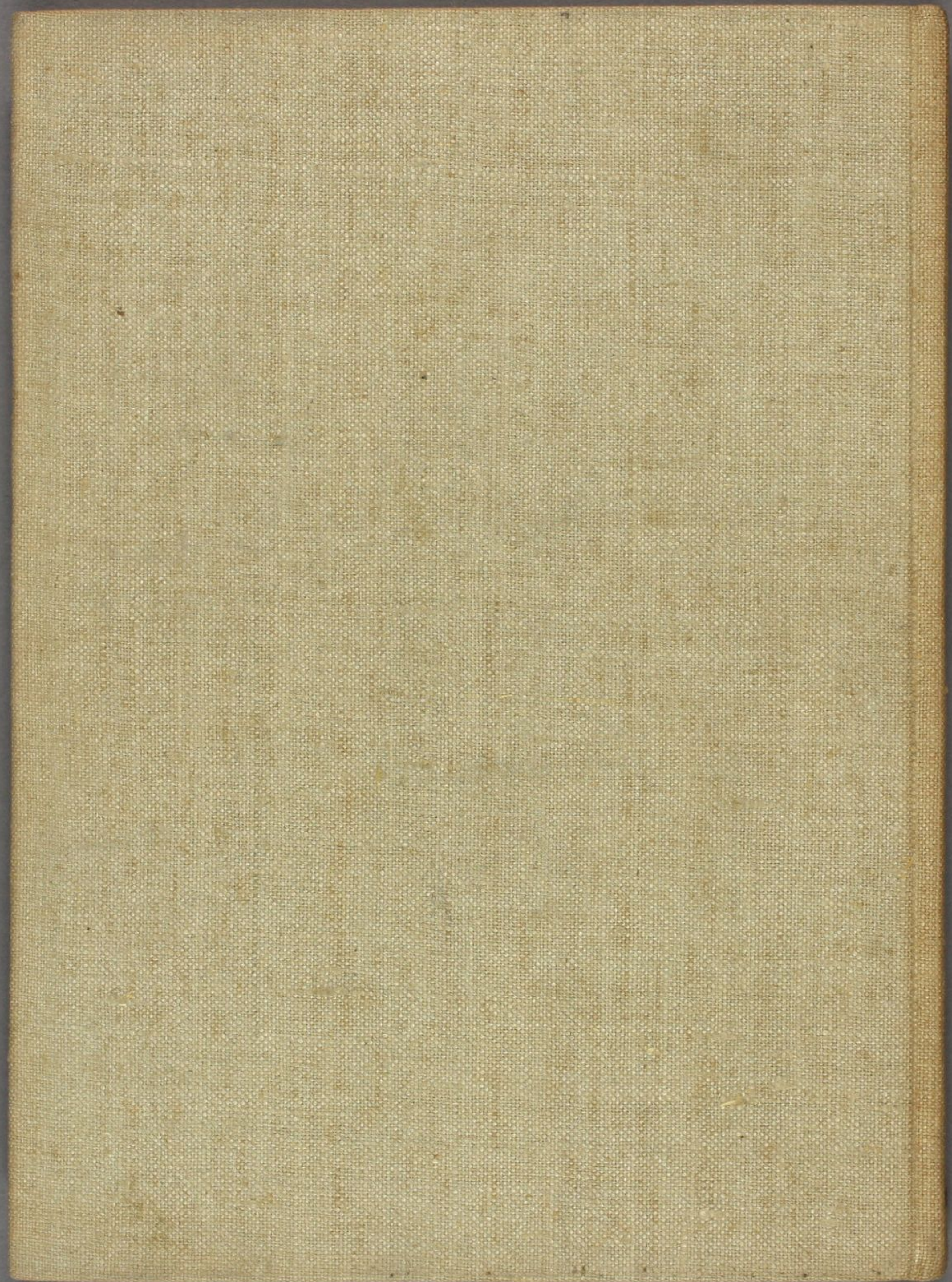


『時代の千』

富田碎花詩集

大鐘閣

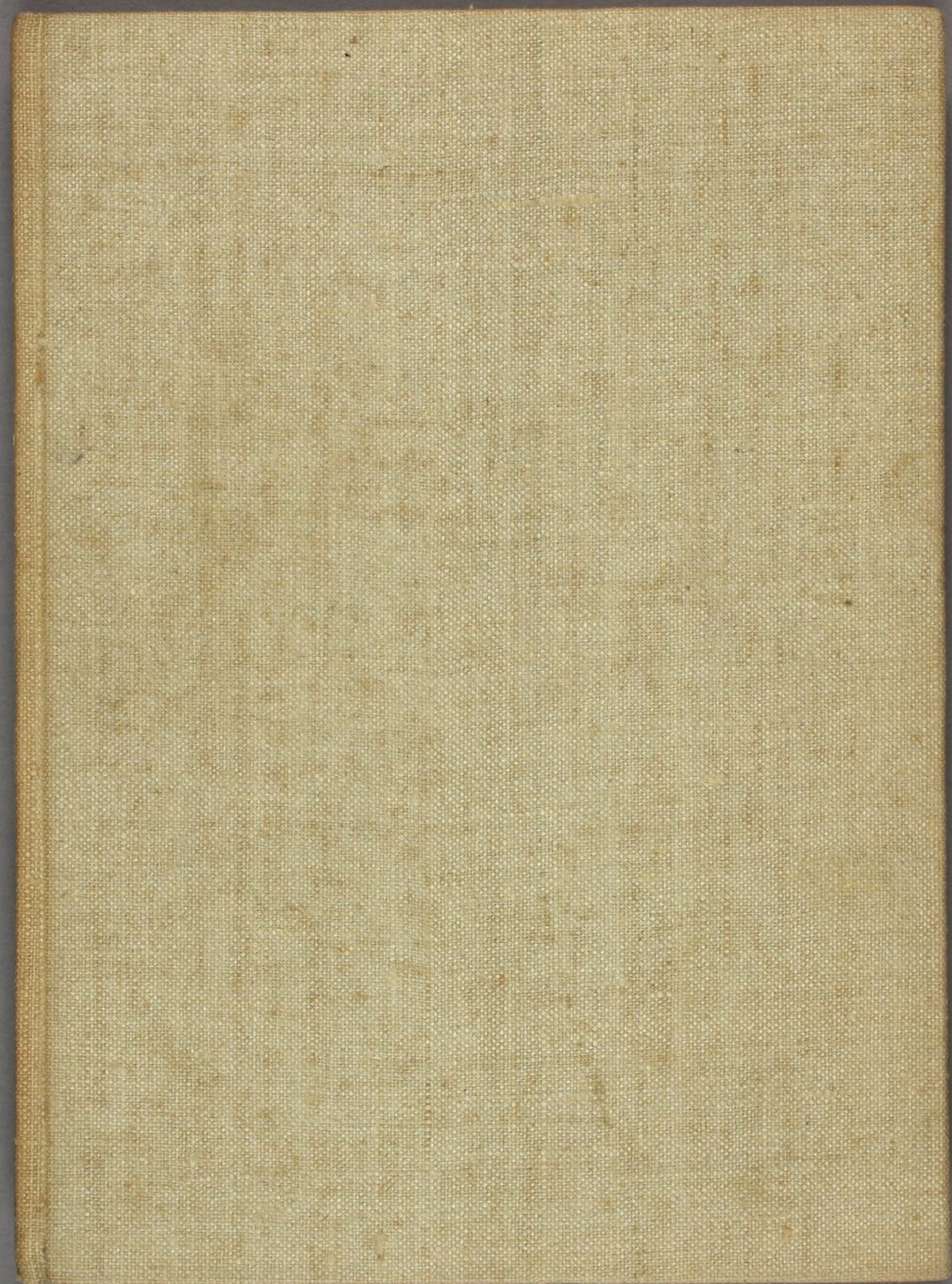




時代の手

富田碎花詩集

大隈堂刊





集 詩
手 の 代 時

花 碎 田 富

閣 鏡 大

販 大 ・ 京 東

MCMXXII

詩集『時代』の手

序

『時代』の手は、著者の『末日頌』、『地の子』に次ぐ第三詩集であつて、一九一九年以降四ヶ年に涉つての作品全部である。著者は、この數に於いては極めて弱小な結果しか齎さなかつた期間を、如何にして『詩』を生くべきかに潛念したこと、に於いて、内的生活の必ずしも貧しくは無かつたことを自ら慰め得るの小さい衿持を有つ。詩歌の時代が來たといふ、詩人は自らの努力の漸く酬られたことを思ひ度いであらう、無理からぬとはおもふ、然し『時代』の手の著者は微笑をもつて、これらの言葉を『無限』に對つて擲ちかへさうと努める或る質實な詩の修道者たちの精進に絶大の肯定を與へやうとするものの立場に同感するものである。(蘆屋・一九二二年七月)

『時代』の手

『時代』の手

『時代』は、

この日、あひ 徽の花のむら 簇のなかから
朗らかに笑みかたむけて
手を差し延べる。

巡禮者の慄く心も、力づよく

『世紀』の嵐の衣を脱ぎ棄て、
その堅い、厚い層を突き貫いて、
『時代』に結びつく。

『時代』は絶叫しない、
ただ押し黙つて
亂されない空気の
その底から手を差し延べてゐる。

4

『時代』の手（エスキース）

『時代』の觸手は、
飽くまで、その微睡をつづけてはあ
るが
地を吹き捲く颯風に脅かし盡された『世紀』の、憔悴の若ものにまで
やはらかに延ばされて
夢を通はす。

痛々しく心破れた『世紀』の若ものの

5

胸は次第に繕はれ、
肩聳やがした想ひも
宥められ、

あるがままの若ものの情感に
飽和されて、いま、
静かに『時代』に對ふ。

『時代』よ！

6
君は、時に順つて流れ、
何の抗ひの痕跡をも示さず、

7
『現在』に臻りついた、

(——かのやうに見える)
が、其處に、
幻のやうに、音なく、簇る
幾多の『世紀』の亂闘や、
流血や、
叫喚の泡立ち。

——その物語の讀者は、
爪先だつた歩態を止めなくてはならない、

破れ綻びた心は、そのまま投げ出すがいい、
諾！ 諾！

いま、この若ものは心を平かにしつつ、

『時代』に對つて

念ひを専らじつぱにするのである。

——法隆寺金堂の壁畫によりて成れる——

十字街

無言の黒衣僧が

夕空に呪符を描いた、

白い街衢は

それ自身で十字を切る、

『人間苦』は火花を散して

燃える、燃える、

そして永遠に、そこに、(十字街に)
釘付けにされて曝されてゐる。

『都市』の肖像は

滄浪として歩みを刻んで
いつも、そこを(十字街を)
血みどろになつて通つてゆく。

*Eidolon

10

不可離の世界

冷靜な解剖刀が、
究理を、

肉體のなかへと分け進める。

燃える情熱は、

冒険を、

11

靈魂のなかへと突き進める。

『究理』と『冒険』が立ち竦んだ、

そこは――

靈魂と肉體とが不可離の世界だった。

秋

蒼穹にむかつて

投げる、火の祈禱。

むなしきより顯はれる

かたち、『希望』のかたち。

凡百の生物の踴躍の
姿相——その烙きつけられた心の扉。
人も躍れ、樹も躍れ、
澄んだ大氣のなか。

放浪の頌

最初の放浪者、

アダム、

君は『神話』から躍り出て、
私と腕を組む。

恩寵から突き放された日の

山岳悲歌

16

君の寂寥と、

希望への踴躍を

私は、この日

頷けまへすることができぬ。

おお、外の嵐の快さよ！

内なる心は

いま旺んな饗宴だ。

冷たい火花

急雨の灌奠くわんでんの後を

虹は護摩ごまを焚き

樹々は

一齊に脊延びして枝を、手を

大空に向つて舉げる、

そこには

永遠の謎が、赤い窓を開けて
生きものの祈禱を吸ひ込む。

凄じい幻だ、
虚空を望んで攀ぢる人間のたましひの
冷たい火花。

20

投げ棄てられた鑿

彼れは、
どこから先づ鑿を當てやうかと考へた、
山岳の巨像は
押し黙つて彼れの想念を押し迫つて來る、
身動きのならない苦しさを、
次いで呼吸の突止が來た。

21

昏倒しさうになつた彼れは危く起き上つて、
再び鑿を握る手に力をこめた、
だが、どこに鑿を當てるべきかに迷ふことは依然として異るところが無い、
相對してゐる山岳の力はあまりに大きい、
そこにある自然は抜き挿しならぬ張りを見せてゐる。
彼れは吐息と一緒に鑿を投げ棄てた、
人間の非力を想ふの念に魂を湧きかへらされながら。

香煙

試みに地上三千米突^{イシ}ほどの邊を劃^きつて
霧で、それ以下を閉ぢて見やう、

私がいま立つてゐる絶巔は、島のやうなもの、

この邊の山嶺は、

まア群島だね、

一寸、海の底の人間の世界のことを考へて見やうか、

——イヤ、

とても考へられないほどそれは遠い遠い世界のやうな気がする。
 だが、待つて呉れ、私のたましひがそこから香煙のやうに
 一縷高く^{すぢ}炷^たかれてのぼつて來てゐるのを忘れてはいけない。

冷たく燃えるもの

八月の大自然のなかに

冷たく燃えてゐる山岳よ、

あはれな詩人、

彼れはその表現を喪つた、

彼れの想念は爆ぜ切れるばかりで、

胸は嵐の夜のやうに懊惱し、

たましひは、臍を掻き廻はされる苦悶に浸りつづけ、

出導線は

差し延べる手を嘲笑して遠のき、遠のく。

表現を喪つた日、

詩人の姿もまた冷たく燃える。

或る旅行記の一節

黒闇は塗りこめてしまつた、

(減多矢鱈に)

千年の湖沼も、

峻々たる山々も、

轟々と樹つてゐる大木も、

繪のやうな白樺の林も、

手の切れるやうな泉からの流れも、
ただ、
一つ、圓錐形の窓だけを残して。

絶巔近く

身は、やうやく乏しくなつた草を吹く風のたましひか、
たゆたふのでも無ければ、
とどまるのでも無し、
ただ念おもひをあつめるのは
次ぐ一歩である、
明るい空気を鮮やかに分けてのぼる次の一歩である。

痛々しい紫黒の身肉をさへ見せる遠方の峻しい嶺々、
物柔かな近くの峰々の皮膚、

雲々のただなはりやう、

いつまでも續くであらう寂しい吐息のやうな噴煙、

さては湖沼の布置など――

それぞれに生命あるもののやうに押し迫つて來る、

だが、これは肉體を自然にかへし盡したたましひである、

漂々として吹く風だ、

30 ただ念ひをあつめるのは

31 次ぐ一歩である。

五月の歌

旅人は草を藉いて

長い息をのみ込んだ、

——じとみ腫は遠く

かぎりもない山脈が

こよし辛夷の花のやうに咲き簇つてゐる

32 五月の空の

33 匂はしい邦の

幻想へと吸はれてゐた。

彼れの心は

胸をふるはせる喜びの日の追懐も、

凍いてつく冬夜の

痛ましい街頭の彷徨も

この時、傷手いたでとして残るには

あまりに晴々としてゐた、

たとへ快い憂鬱の影が

まるで無いとは云へなかつたにしても。

旅人には

いま、身と心とをつつむ青草の褥と、

想ひを通はせる

遠く、遠くはてしなく流れる山脈と、

匂はしい空とが

夢のなかの實在として蒸つてゐるだけである。

省略

重い白蠟の雲霧は、

脚下の都邑と、田園と、

湖沼、河流、さらにそれにつづく遠くの海洋を封じた、

——そこに、生きものは大海の魚のそのやうに動き、

昆布のやうな樹木が動揺してゐるやう、

が、それらは想像を誘ふだけで、

私をとりまくのは

今や、音響と色彩を絶した世界である。

雲霧の大平原、

その地平線のうへに

かぎりもなく、雪を被いだ山脈の浮彫の

稜角また稜角、

それらは――

私がいま此處にあつて

36

胸を張り、

37

ひろげられるだけひろげて

相對する双手の兩端よりもなほ長い長い連互を見せてゐるのである。

それらの或るものたちは

なほまだ生きものの世界には訪れることをしない太陽を敏感にとらへて冷

たく燃えてゐる。

何といふ大まかな觸致で、

グイグイ肉付けをして行つたことだらう、

恐しい藝術家の力が

抜き挿しならぬやうに迫つて來る。

おお、
 それらの雪白せつぱくの山脈だけ！
 そして雲霧の大平原だけ！
 残餘あとのは鑿あてぶツかいて萬有から省略しちまふがいい、
 恐しい力は、
 美は、おのづから頭を垂れさせるに充分である。

自主の峰

私の樹たつてゐる峰だ——『自主の峰』だ、
 私が雙の手を擧げながらの歡聲を
 吹き散らし、吹き散らす嵐よ、
 何處に暴れて行かうとする嵐だ、
 私わのよるこびを何處へまで傳へやうとするのか、
 嵐、嵐、

私自身もいつかそれであるやうに
あらゆるものうへを躍つて過く。
麓の方を過ぎ、渦いて過ぎる嵐、
その真ただなかに、根こそぎ
さらはれさうになりながらも、
何といふその弾力性ぞ、
草と樹とは髪を振り亂して鬨ふ、
それから、
喘ぎながらも雄々しくみづからを
嵐のなかに曝露してゐる『自然』、

『自然』の一切、
そのうへに君臨してゐる峰だ。

活
體
放
浪

活體放浪

いま、此處に、

一人の貧しい活體解剖者は、

檢索のメスを棄て、

全身全靈を痲呆に委ね、

夢遊病者さながらの遊行を始める……。

I

心臓よ、

胎生の心臓よ、

やがての日の潑刺とした搏動を想はせる心臓よ、

だが、今はまだ眼覺めてはゐない、

細胞は凝集と組成とに忙しい、

見えない大きな工人の眼は看視に光つて、

重く閉ぢた高い、高いところから絶え間ない

俯瞰を送つてゐる、

46

しかも心臓をめぐる大動脈と、肺動脈は、

47

小循環、大循環のすべてを収めて、

折柄の寒天さむからをのせて、

おのづから燃え、燦る、

これは古代更紗のやうな

物象の虹の彩を移し運ぶ。

II

濃い碧の亞爾簡保兒アルコーブルを湛へた洗盤のなかへ、

ぐつと突き出した無遠慮な巨人の手、

そこには蠅のやうなランチが停まり、

馬蛇のやうな内海通ひが發着する、
 また鵬が、翼をひろげるかたちに船跡をのこして音もなく靈魂の薄明のやうに、
 遠方に這つてゆく船舶、
 燃える、燃える、白晝の亞爾箇保兒、
 折しも病兒が吹くチャルメラか、
 いや、それは煙筒のかげの、海のやうに深い澄んだ睡をした若い水夫のありの
 すさびの明笛だ、
 傷ましく涙腺を刺戟して。

蒼赤色の血液が、
 音も立てず靜脈を急ぐ——
 靄に滲んだ冬の陽の落ちるまへだ、
 動かない黒い怪獸のいくつかからは、
 漆黒の惱みを吐きつづけ、
 その時、押しつけたやうな寂寞を裂いて、
 虚空にむかつて太い咆哮を投げつけた、
 また紫黑色の隨意筋の鐵橋のうへを、
 衝動の玩具の電車が、とつともない音を響かせて、轉つて行く、
 遠景の黄色に枯れた毛細血管の葦原には、

凝血のやうな黙牛が残されてゐる。」

IV

おお、血管網の窓帕の、

なかは堅く閉ざされて、

饗宴をうかがふべくもないが、

華やかに燭火はゆらめき、

破風傷菌の音符は狂ひ舞つて

耳を聳たしめる、

50 石階に踞して、貧しく慄きふるふものよ、

51 その人々の天國は、麻醉と假死にあつてだけ實現されることであらう。

V

萬華鏡の舞踏は、

はてしもなく續く——

烈日の下のとある亞刺比亞の小邑の、

市場を想はせる、

だが、此處は陰鬱な冬空の下、

閉ざされた霧の街の神經叢の姿である、

噎がれ聲の商人の視神經は、

往き來忙しい、骨立つた顧客の顔面神経の走行にいらだたされる、
眩惑する華やかな商品のゴブランは、
錢貨の紋章の浮織である。

VI

53
觸角は、
貧乏と苦惱とを運んで來る夢魔の前哨に過ぎない、
晝夜、
間斷なく巨體を侵蝕して來る
52
それらの病原はどこから發生するのか？

53
おお、無数の病原么微生體は
汗と、埃と、膏と腕を組んで跳梁を極めてゐる、
來るものは凱旋の兵士のやうな喊聲を擧げ、
去りゆくものは斷末魔の悲鳴を残しながら。

VII

獸窟！惡臭！
ここは巨獸の臟腑である、
齒を喰ひしばつた犠牲の最後の死守の要塞である、
科學者よ、

既ういよいよ君の博識の破産の時が来た、
君の論理の遊戯を譏笑するものの顯現がこれだ！
一切合切の病理時代だ、
人は地獄に隣して呻いてゐる。

—大阪一九二〇・二一冬—

亡
靈

亡 靈

蒼い顔、

曇つた額、

孤島の漂流者のやうなその頭髮、

底光りのする眼、

垢膩くじで薄汚れた皮膚——

ありとあらゆる生きものの淺ましきそのものの姿をして

さらほひ歩く亡霊！
それは『抒情詩』を覚えあぐんでゐる
人間の姿だ。

58

夜

燃える血のチュウリップを樞軸に、
今こそ、宇宙は私のものだ、
春の夜は、
時として迷つた翅蟲が翅の音を
夢のやうにこぼすだけで、
物音の絶した真空である、

59

悩めるものの思念も

このときは残りなく鎮められて
平安に呼吸づく。

部屋のうちの物體に

濃い陰影を伴はせて

飽くまで、心澄ましてゐる燈光、

秩序なく置かれたものの

而かも私の心のなかのやうに

60 決して無檢束では無いのだ、

61

私は黒暗ヤミのなかにあつてすら

私の欲するものを自由に探ね出すことが能き、

手に取ることができる、

それは往きつけた街のやうなものである、

私は或る街衢の角に

大きな時計臺と、銀行と、幾層かの高樓をもつた雜貨店と、さらにキヤツ

フエを知つてゐる、

さらにそれらを縦横に刺繡する諸種の交通機關を、

さらに、さらに、八方に蜘蛛手に渉す活潑な街並の店舗の萬華鏡を、

——そのやうな私の部屋だ。

私はいま『思念』のなかの散歩者だ

私は私の見慣れた物體の一つ一つをほんやりと眺めながら行く、

それらの物體の一つ一つが、

それぞれの歴史と物語を私に話し掛ける、

貧しい詩人の生涯には、

華やかな情景の一つすら點綴されない、

陰惨な一すぢ路の連続である。

.....

62

ただ、

63

今、眼のまへには血紅色の一輪に

チュウリップがせめてもの華やかさを

燃やしてゐる。

冬景の一片

粗い觸致^{クワチ}だが、

靈感の動くがままに大膽に

肉付けをした山の姿相^{すがた}、

そこには綿羊の毛並をした杉の木立があり

風にかがやいて

64 やはらかい戦ぎをはしらせる、

65 また、牝豚の皮膚を見るやうな

丘々の地肌は、

時に、人間の乳房の隆起を想はせて

惱ましいこと一しほだ。

二月の温い太陽は

しばらく動くことをしないで、

蒼空で笑ひ、

嵐の日の陰鬱な耕作者の心ではなく

收穫時の歡喜を自信して、

閉ぢ込んだ萬象を

光のシヨベルで搦りかへしてゐる。
人間の心も
冬の幽閉からしばらく解き放されて
軽い踴躍を感じてゐる、今だ。

こぼれ残る夢

五月の、
飽くまで澄んだ碧空に
まざまざと彫り透した山、峰、丘の容かたち、
時として紫を塗り、
緑を塗り、
また荒く削り取つて灰白の身肉を露はし

甘美な痛々しさを旅人に示す。

野には、

麥が實り、

雲雀は、虚空にその軽い舞踏をつづけ、

啼き聲を落す、地のうへ……

路にはしばらく佇む

一人の旅人の姿。

68 一切が快い眠りのうちに

69 展げられた舊王城の地よ、

銀鈴を鳴らす川々、

緑を炷く峰々、

また、一齊に太陽に向つて脊延びをする足を大地に即けた生きものたち

——樹、草、

それらに相應しいそれぞれのいたいけな捧げものからは、

旺んな芬香を漲らせ、

快い陶酔の夢をこぼしてゐる。

翳りゆく展望

翳りゆく展望

涯はしない展望、

何といふ大観！

希望の緑に燃えた若い樹々の葉の間から、

快げにあてもなく瞳を放つ……

想ひのなかの風景。

都會なら都會でいい、
 雲に突き入る高い尖塔を中心にして
 翼のやうに四方に展がつた大小さまざまの建築物、
 またそこを心臓にして
 八方に蜘蛛の巣のやうに架け渡す街道、鐵路、電線、
 そこに自ら一滴の油が落とされれば
 池の水のうへの波紋は次第次第に擴がつて
 やがては最も遠い僻陬の
 うつかり者にまでもに達してゆく。

何といふ大きなマンモスが
 搾木しぼぎにかけられてゐることぞ！
 血みどろになつた巨獸の呻きの
 やがては地軸にまでも聞えやうものを、
 そこに醸かされる騷擾、殺戮、懊惱、苦悶——
 そんなもの一切は押しつけるだけ押しつけるがいい、
 そして、反撥の力のどれだけ恐ろしいかを『權力』の陶酔者に知らしてやる
 がいいのだ。

またここには工場地の煙突の林の壯觀、

威勢のいい煤煙は

晝も夜も、休むときなく惱みと歎びのすべてを吐いてゐる、

(——私はこれだけの暗示にとどめて、

はち切れるばかりの熱を湛へてゐるポイラアの前に

夜叉のやうな形相の——だが、神の心をもつた焚炭夫にまで筆を及ぼすまい、
恐らく人々はそれを心のなかに描かずにはゐるまいからだ。)

また埃を吸つて硬い建物のなかで錢貨の亡霊と闘つてゐる書記、

恐らく君の肺臓は蝕むしばまれてゐるだらう、

76

君はもう大きな力一ぱいの呼吸には耐え難くなつてゐるやしないか、

77

君が曾て母の懷から夢見てゐた世界はそんなものでは無かつた筈だ、

もういい、もういい、

そんな蒼い顔を向けなくて呉れたまへ、

今だ、

たつた今だ、

君のペンを棄て、算盤を擲つて野に走る時が來たのだ。

嗚がれた聲を張り上げて

末世を罵る教役者、僧侶たち、

君はもう一度子供にかへるがいい、

信仰の初めの日にかへるがいい、

君の靈も肉體もあまりに汚れ疲れて居過ぎる、
上ずつた眼の何といふ痛ましい輝きぞ！

また、

若い娘が

彼女の長い黒髪を梳くうれしさで
彼れらの畑を耕してゐる農夫たち

また祈禱の心で蒔かれてゆく

78 さまさまの種子！

79 — だが、一日の快い疲れの晩歸の途に、

地主の大きな穀倉が

黒い魔物のやうに

やがて秋の飽滿の日を^{おぼろ}儉笑ひして待つてゐるのだ。

展望は曇つて來た、

地平線に湧いた一ちぎれの

黒い雲がやがて地のうへの一切を翳^からしてゆくだらう……
嵐の豫示だ、

そのむかふの邦のかがやかしい晴れた日の先觸れだ、

一切の生きものよ、
しばらく呼吸を凝らせ、
ただしばらくの間だ。

80

鞍上に哄笑するもの

地に歸るものは歸りはてた。」

萬象は苦熱に喘ぎ、

あらゆる運動は、

——瞬時、

釘付けにされて停まつた

81

苦惱の地、

すべてから解放されたほしいままなものにとつては

苦惱そのものがすでに至大な歡びだ、

躍り上れ、

躍り上れ、

今こそ、

私たちは歡びの飽滿者だ、

地よ、

君が産むあらゆる惱みも苦みも

82 この日、歡喜よろこびに淨化されて

83 君がうへに烙きつける

我れと我が身の姿相すがたを、

仰げばそこには苦慘な地と相照應して

永遠の焔の泉が、

炫く躍り狂ひ

躍り狂ふ。

夏、

萬象から被掩を剝ぐ力の賦與者、

我れらが虚偽と罪惡の鎔鑛爐、

浄化の煉獄よ、

——永遠に呪はれたものすら罅ひまを出る季ときだ、

植物といふ植物は濡れたやうな縁を着た、

今だ、

内へ、内へと探り進めた思索の踏歩たふほを

外へ、外への疾驅さぐに代へて

躍り出る、

躍り出る、

友よ、

人々よ。

84

85

そこに君たちを待つものは

一團の火の塊かたまりの神馬ペガサスだ、

おお友よ、君も乗れ、君も乗れ、

誰一人として拒否されてはならないぞ。

此處に、

我れらのまへに涯もなく展ひらけた

馳場の、

見るからに心を躍らすではないか、

誰れ舉げるとなく一齊に鞭を擧げる、

神馬ペガサスの疾驅は

乾板の感光よりも迅い、

飛べ、翔けれ、おもふままに、

そして鞍の上に人々は、次の瞬間に現實に根を下ろすべき希望を振り落されぬやうに緊つかりと掴んで哄笑をつづけてゐる。

火神と彷徨者

此所では、一切合切が淨い、

此所は『生活』の祭壇だ、

『労働』の至聖所だ、

肉體も心靈も貧しいものではあるが、

つねに不満を超絶してゐるもののメツカだ、

おお、

この焔の修羅場にも似た工作場を縦横に馳驅する

火神ブルカシの等身の胎兒たちよ、

膏と汗とに塗れて濡れかがやいてゐるその額、顔、そして大きな大きなその肉

刺だらけの手、

人間が創造し得る限りの熱といふ熱が青くホツホツと息づく煉獄！

——轟音といふ轟音は、

最も微弱な不協和音すら許さないで壯大な交響樂をおのづから奏する、

おお、誰れだ、

この熾んな、烈しい、一切を統べる管絃樂の大指揮者は？

88
それは誰れでもない、

89

此所、現實に見る宇宙の隅々にまで澎湃として漲り溢れてゐる『労働』の

精神そのものだ、

此所は何ものにも汚辱されてはならない、

此所は何ものが鐵蹄を乗り入れることからも自由であらねばならない、

此所では『資本』が白い齒を見せることがない、

『労働』の最後の死守の要塞である工作場、

一切合切が淨い

『祈禱』の馳場よ！

今、

そのなかへ一人の彷徨者が

紛れ込んだ

蒸気で一ぱいになった汽鐘キョウに

安全瓣アセが要るやうに、

この渺たる私が君たちにとつて無意味だと誰れが云へやう、

君たちに一聯くわいの歌が上げたくて來たのだ、

この彷徨者の、

頭髮は風や雨に櫛くられ浴みして亂れてはゐるが

太陽が接吻することを忘れなかつた額かみは曇りを見せてはゐない筈だ、

90

衣物は永の旅にズタズタになつて醜く見えやうとも

91

靈魂の殿堂の壯麗を被掩物の如何によつて判断してはなるまい、

私は君たちが必要である筈の

勞働の讃歌をこの靈魂と肉體とで綴つて來た、

そして永い彷徨のはてに

やつとそれを手づから渡すために、

此處に、

君たち——

火神ヒカミの等身の胎兒たちのなかに

私自身を見出したのだ。

支那詩集

胡地の夕

愚鈍で、従順な家畜は
はげしく、思郷の念おもひを湧わきかへらせて、
夕空に、
聲こゑふるはせて、嘶なく。

旅人は、

いま、

胡地の夕風に
涙をのむ。

おお、胸を衝いて湧き泡立つ

この情感！

自分は、これを飛躍しなければならぬ、
これを振り棄てなければならぬ旅人である。

「歴史」は、乾き切つた砂埃すなほりまに塗れ、

風物のなかから
徒らにその吸盤を
人に伸ばす。

たとへば

ここに於て、一日の行旅のはての
風雨に毀たれつくした黄褐わうくわつどの土岩、
その土の色と照應した顔をもつ稀れに薄い住民！

たとへば

ここに於て、音を絶えた自然

——その涯から

のぞき出た圓形の妖靈！

たとへば

ここに於て、魂をさへ凍らせて

『物語』のなかから

槍を投げる朔風！

98 愚鈍で、従順な家畜と

99 旅人の

姿が、長く、濃く

焼きつけられる……

かぎりない平沙の海の一瞬。

塞北風景

追はれた民族が
平沙の海を越えて
忍耐強い船を
いま、
港につけた。

100

401

船は
この宵こそ、乏しく貧しい休息が得られやう、
冷たい月光の下の駝^た棧^{ざん}！
その傍には凍てついた西^{せい}溝^{こう}が灰白の夢を結ぶ、
そこから糸を曳いた幻想——
白^{はく}天^{てん}夜^や晚^{わん}走^{そう}！

*
駝駝の宿屋。土壁で圍んだ露天の小區劃なり、その内部に駝駝を隠すまで追ひ込んである。
**
張家口（蒙古名カルガン）の大境門外にある河、凍てついてあるそのうへを通つて戈壁（ゴビ）の沙漠
の向ふの庫倫（クールン）ヤ、白帝城に近いドロンノールヤ、綏遠、歸化の兩城の方への道路（？）が

ある。
晝夜兼行。

洋河

疎林——といふのだから、

あんまり大きい樹てはいけない、

無論、葉は落ちつくしてゐるんだ、

君の佇立してゐるところは小高い丘なのだぜ、

河は平原の遠方から

一刷毛で、雲母のやうに描いて欲しい、

それが、君の脚の下を過ぎて

反対の平原の方へ筆勢をそらせる、

河の彼岸からは

直ぐに緩い斜面を見せる禿山の連互を置きたい、

白晝ならば楮味を帯びてゐる筈なのだが

夕方だからいふまでもなく灰白色で無くてはいけまい、

河を、雲母のやうにと注文したが、

それで凍つた感じが出たか知らん？

海拔四千尺近い高原だが、

104

雪なんか降らせては駄目だ、

105

水蒸気が皆無で、乾き放題なんだからね、

無論、風の冷たさは朔北特有の針を揃へて攻めつけるやうなのさ――

牛や馬に荷車を曳かせて土民が、

その凍つた玻璃のうへを渡つてゐる、

君が佇立してゐるのは小高い丘なのだから、

その生きものたちは『馬は寸に、人は豆のやうに』といふ感じで懇へて來

なくてはない、

あ、忘れた、

七日か八日の月、月！

無爲の祭司

深く、大地に根を下した
一本の立樹のやうな、耕人、
君の姿は、
あらゆる主張を超え、
あらゆる論議を後退りさせる。

106

107

いま、

此所に立つ私に想へて來るものは
ただ茫漠たる黄褐色の平野だけで、
深く冬眠に入つたそこからは
それを外にした色彩は絶無である。

乾き澄んだ碧空！

多彩な興亡史を嘲笑し、

音も響もない單調に遠りつくして

押し黙つてゐる黄褐色の平野！

いまは白晝である、

そこに、大地から生へ抜けたやうな
耕人、

君の無爲の立姿にこそ

大自然は凝つて動かない。

おお、一切の文明よ、

それは手を拱ねいてゐねばならない、

この黄褐の大祭壇は

108

109

それ自身で四時の営みをする、

無爲の祭司である耕人に、

やがて春に緑を萌やし、

秋の收穫とばいを贈る

祭壇ではないか。

或る日

愚かに、小さい憤怒は
風にあづけるがいい、
雲にあづけるがいい、
水にあづけるがいい、
今日、いまこそ！
110 心臓に痛さを覚えるまでの

111 深い、長い呼吸を味ひ知つた身である。

視野のかぎりの
押し黙つた、寂靜たる『自然』の
その壓し、迫る力は
何を示唆しやうといふのか、
人も亦、
發語を忘れて、佇み呆けてゐる。

112 草芽^{ちしあひ}生ひ茂つた未知の濱邊への漂着者たち――

ハヨク

彼れらは恐らく、この地を母胎としたであらうと想像される、
いま、自分が立つて、
埃塗れの沙漠の風のなかに
彼れらの幻の墓を描くことは
傷心の業ではあるが……。

噫、

112
この恵まるること薄く、落莫たる自然に抱かれて
みづから醸した血潮の酒に
酔ひ痴れて

113
放浪の帝國を夢みた
古人たちの姿相は
またなく慕はしいものにおもはれる。

風につて恣に旅したであらう、古人の
心は、西し、或は東した、
いま、旅人の肉體と靈魂は、
幻の故郷に現前して
痛々しい想ひに胸躍らすばかりである。

—家—

古—

ハヨク

目次

『時代』の手

『時代』の手 三

『時代』の手 (エスキース) 五

十字街 九

不可離の世界 二

秋 一三

放浪の頌 一五

115

山岳悲歌

冷たい火花 元

投げ棄てられた盤 二

香 煙 三

冷たく燃えるもの 二五

或る旅行記の一節 二七

絶巔近く 元

五月の歌 三

116

117

省 略 三五

『自主』の峰 元

活體放浪

活體放浪 四

亡 靈

亡 靈 四

夜 五

117

冬景の一片 四
こぼれ残る夢 七

翳りゆく展望

翳りゆく展望 七
鞍上に哄笑するもの 八
火神と彷徨者 七

118 支那詩集

119 胡地の夕 五
塞北風景 一〇〇
洋 河 一〇三
無爲の祭司 一〇六
或る日 一〇〇

ハヨメ

同じ著者によりて

◇『末』の『頌』詩集(絶版)

◇『地』の『子』詩集

◇『時』代』の『手』詩集

◇『富田』碎花詩集』詩集

◇『民主』主義の方へ』譯詩集(絶版) エドワード・カーペンター原著

◇『草』の『葉』譯詩集(I)直既刊(以下續刊) ウォールト・ホキットマン原著

◇『カーペンター』詩集』譯詩集

◇『解放』の『藝術』論文集

◇『愛蘭』詩人研究』(近刊)

大正十一年八月廿五日印刷
大正十一年八月廿五日發行

『時』代』の『手』

不許複製



著者 富田 碎花

發行者 東京市京橋區桶町十五番地
株式會社 大 鑑 閣
代表者 面 家 莊 信

印刷者 東京市小石川區久堅町百八番地
土 谷 清 隆

印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地
株式會社 博文館印刷所

定價一圓九十錢

發行所

東京市京橋區桶町・大坂三休橋南
振替東京三六二八・大坂二七一五五

株式會社 大 鑑 閣

印刷所

カヨマ

現代代表詩選

(1) 百田宗治著 青い翼 送料 定價二圓二十錢	(2) 室生犀星著 星より來れる者 送料 定價二圓三十錢	(3) 佐藤宗之助著 荒野の娘 送料 定價二圓五十錢	(4) 福田正夫著 船出の歌 送料 定價二圓四十錢
-----------------------------------	---------------------------------------	-------------------------------------	------------------------------------

東京・大鐘閣・大阪

1133

時代の手

富田碎花詩集

1133